OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 60年代デザイン運動と東京オリンピック : 「ペルソナ」展と「空間から環境へ」展を手がかりに |
| Author(s) | 伊村, 靖子 |
| Citation | デザイン理論. 2015, 65, p. 108-109 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/56413 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 60年代デザイン運動と東京オリンピック
## ──「ペルソナ」展と「空間から環境へ」展を手がかりに ──

伊村靖子／国立新美術館学芸課　情報資料室

1960年，世界デザイン会議の開催直後，東京オリンピック組織委員会（OOC）により勝見勝が招集され，座長として10名のメンバーを推薦してデザイン懇談会が発足する。懇談会の協議の結果シンボル・マークの指名コンペが行われ，亀倉雄策によるデザインが今日広く知られることとなったのは，衆目の一致するところであろう。

デザイン・ポリシーを浸透させるにあたり，「東京大会マークを一貫して用いること」「五輪マークの５色を重点的に用いること」（河野鷹思）「書体を統一化すること」（原弘）に加え，細部にわたりトータル・デザインを徹底するためには，東京オリンピック組織委員会の中にデザイン室（旧赤坂離宮，現在の迎賓館の１階）が設置されるのを待たねばならず，それはオリンピック開幕前まで１年を切った1964年春のことであった。

勝見はデザイン室の役割を三種に分け，その方針のうち第二の役割として，若手デザイナーを招集した目的について，「いろんな場所と施設に用いられる標識や掲示のデザインを処理するために望ましい，一定のフォーミュラをつくりあげること」を掲げている。そのために「杉浦康平・田中一光・粟津潔の三氏の協力を求め，つづいて勝井三雄・安斎敦子・山下芳郎諸氏の参加を得て，デザイン・ガイド・シートの作成に着手した。一方，丹下研究室の磯崎新，GK 研究所の栄久庵憲司の二氏にも参加を求め，明治，代々木，駒沢その他の競技施設エリアの環境整備と標識配置の計画にも着手した」（「オリンピック東京大会のデザイン・ポリシー１」『グラフィック・デザイン』第17号（1964年10月））。

本発表では60年代にデザイナーとして頭角をあらわし，東京オリンピックを起点に後に1970年の日本万国博覧会（大阪万博）に関わっていく若手デザイナーの他分野との交流を探るひとつの試みとして，「ペルソナ」展，「空間から環境へ」展と関わりのあった人々に注目した。

「ペルソナ」展（1965年11月12日～17日，銀座松屋８階）は，かつて1955年に亀倉らを中心に７人のデザイナーが立ち上げた「グラフィック ’55」展を意識し，若い世代11人で組織したグラフィック・デザイナーによる展覧会であった。「グラフィック ’55」展には，原弘，伊藤憲治，亀倉雄策，河野鷹思，早川良雄，山城隆一，大橋正が参加，「ペルソナ」展には，粟津潔，福田繁雄，細谷巌，片山利弘，勝井三雄，木村恒久，永井一正，田中一光，宇野亜喜良，和田誠，横尾忠則およびゲスト５名が参加している。「ペルソナ」展カタログの冒頭で，勝見勝が「チームワークと無名の行為を求めつづけられてきたペルソナの人々が，個性の表現を指向しはじめたのも，私にはごく自然な成りゆきと思われます」と述べたように，同展は東京オリンピック以後，各方面に活動を展開したデザイナーの意思表示とも言えるものでもあった。

例えば，粟津潔は，すでに東京オリンピックに関わる時点で60年安保などを通じて日本の政治体制や労働争議などの社会問題を意識していたが，その姿勢は企業広告に関わらずフリーランスとしての活動を選択していたこ

とにも現れている。「ペルソナ」展の翌年，粟津は泉真也，川添登，原広司，針生一郎とともに雑誌『デザイン批評』（1966年11月～1970年11月，全12巻）を立ち上げ，編集に携わる。また，横尾忠則はその批評性をデザインそのものに向けた。横尾がこの展覧会で手がけたのは，《自分自身のための広告》であった。クライアントが自分自身であることとはすなわち，デザインとアートの接近を意味していた。

「ペルソナ」展の第二弾として構想されたのが，「空間から環境へ」展（1966年11月11日～16日，銀座松屋８階）であった。同展のもうひとつの大きな特徴は，1970年の大阪万博との関係にある。

『デザイン』第79号（1966年１月）の「ペルソナ」展特集号の冒頭には，大阪で５年後に開催される日本万国博に対する期待が述べられ，３回の連載として続いている。「空間から環境へ」展はその最中に，日本万国博に関連して建築，デザイン，美術，写真，音楽の各ジャンルからの参加者が「イヴェント調査委員会」を立ち上げた時期にあたり，同メンバーが開催した展覧会であった（参加者：靉嘔，秋山邦晴，粟津潔，泉真也，磯崎新，一柳慧，伊藤隆道，伊原通夫，今井祝雄，榎本建規，大辻清司，勝井三雄，聴濤襄治，木村恒久，小橋康秀，坂本正治，高松次郎，瀧口修造，多田美波，田中一光，田中信太郎，田中不二，東野芳明，東松照明，戸村浩，永井一正，中沢潮，中原佑介，奈良原一高，原広司，福田繁雄，松田豊，三木富雄，宮脇愛子，山口勝弘，横尾忠則，横須賀功光，吉村益信，展示構成：磯崎新）。

かつてデザインコミッティーを中心としたテーマが「デザイン分野の協力」であったのに対し，「空間から環境へ」展では，デザインの垣根を取り払った「デザイン分野の解体」に変化している。同展覧会は，空間デザインのヴィジョンとして「環境」と「観衆の参加」を共有した最初の機会であった。こうした示唆と経験は，磯崎新が設計した大阪万博のシンボル「お祭り広場」の「見えないモニュメント」の理念に引き継がれている。関与の度合いは参加者によって異なるものの，大阪万博は実質的に，照明，音響，映像などの要素をコンピュータのプログラミングによって制御し，大規模な演出を行う最初の機会でもあった。

先の「ペルソナ」展において例に挙げた粟津は，『デザイン批評』誌において反万博の言説と接しつつも，EXPO ランド基本設計主査および日本館構想計画，テーマ館空中展示計画を担当した。さらには，東芝 IHI 館サブプロデューサーを務めている。一方，横尾はせんい館のパヴィリオン（建築デザインとドーム内の彫像）とポスターのデザインを手がけ，「空間から環境へ」展メンバーでは，秋山邦晴（音響ディレクター），植松国臣＋福田繁雄（展示ディレクター・途中辞退。後任に吉村益信と四谷シモン）とともに同パヴィリオンに携わった。

東京オリンピックは，グラフィック・デザインやプロダクト・デザイン，都市計画など各分野の若手専門家にとって，最初の協働の契機となったと言えよう。50年代にデザインの啓蒙時代が終わったとすれば，60年代は高度経済成長期にあたり，大阪万博へ向けた「デザイン分野の解体」，学園闘争を背景とした日宣美解体など，急速なデザイン運動と言説が展開された時期でもあった。その背景に，前衛芸術・文化の拠点となった草月アートセンターをはじめ，「ペルソナ」展，「空間から環境へ」展などにおける各分野の交流を見ることができる。